

二次元ぶち文庫

試し読み版

大熊狸喜

表紙イラストはたろい



ヒカリの巨人

ゴキウバロ

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ヒカリの巨人 コズミックバンラー』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



ヒカリの巨人

スマックバーン

大熊狸喜
表紙 / しばたらい

登場人物紹介

Characters

あまの

天野ヒカリ

普通の子学生。将来は動物病院で働きたいと夢見ている少女。ある夜、光の巨人（男）から使命を受けて、「コズミックバニラー」に変身する力を授かる。

コズミックバニラー

身長二十五メートルの少女ヒーロー。ウェディングブーケを着けたバニーガールの様な姿。エネルギーを消耗するとタイマーが点滅し、尽きると巨体のまま変身が解けてしまう。

冬の夜空はどこまでも澄んで、天空には美しい星々が煌めいている。

海と山が望める郊外の、とある一軒家。この家の脱衣場からは、一人の少女が数頭の子犬と格闘する楽しげな声が響いていた。

「ほら、今キレイキレイするから暴れないの。こらこら、キミもおイタしちやダメ」

天野ヒカリアは眼鏡を外して全裸になり、小さなヤンチャ者達と湯船に向かう。

犬達と一緒にお湯を被って長い黒髪をしつとりと濡らし、駆け回って遊ぶ子犬達を一頭ずつ捕まえては綺麗にシャンプーしてゆく。

「次はキミね、ほら、ジツとしてなさい」

生まれて一週間過ぎの子犬は暴れ盛りで、全裸の少女は乳首を舐められたり、お尻や股間に鼻を寄せられたりと、やりたい放題にされている。そんなヒカリアは先日、とても不思議な体験をした――。

私立学校高等部の一年生であるこの少女が、学校の帰り道で弱っている母犬を見つけたのは、もう十日ほど前の事だ。

ペットショップ兼動物病院である自宅に連れて帰ってきて両親に診てもらったら、母犬はその夜のうちに六頭もの子犬を出産した。

獣医である父によると、母犬の栄養状態はあまり良くなかったらしく、ヒカリアが連れて

帰った事をとても誉めてくれた。

「よかったね、ママになれて……」

自らも獣医を目指しているヒカリは、産後の回復がやや遅い母犬に替わって、毎日子犬達をお風呂に入れてあげていた。

そして三日前の夜、少女はなんと天から降りてくる、光る巨人と遭遇したのだ。

「危険が目覚めようとしている。心優しい君ならば、きっとこの星の命を護る事ができるだろう」

そう言うとき数十メートルはありそうな光の巨人は、少女に不思議な力を与えて去っていった――。

「この星の命を護れって、言ってたけど……」

あれから特に事件があるワケでもなく、もしかしてあの巨人は夢だったのでは、とも思う。しかし右手に意識を集中すると、手の甲に兎のような形の光るアザが浮かび上がるのだ。

だから自分は何かの使命を受けたのだと、黒髪眼鏡少女、天野ヒカリは考えていた――。

「三番、天野ヒカリ！ 行きますっ」

今日の体育は体育館。女子はスペースの半分を使って器械体操で、男子はもう半分でバ

スケの試合をしていた。

学校指定としては今時珍しいブルマに身を包んだヒカりは、眼鏡をかけ直して気合いを入れて、平均台へと脚を掛ける。

「それっ——あわわ」

が、運動の苦手な眼鏡娘は二歩と進めず平均台から転落してしまった。

ピッと笛が吹かれると、次の親友はネコのように軽々と台を渡ってしまう。

「うう……やっぱり私、運動神経ないのかなあ……」

平均台とはいえ、すすつと渡ってしまう友達の姿はカッコイイし憧れる。しかし羨ましがな視線を送るヒカりのオデコを、ネコのような親友はツンとつつく。

「なくに言ってるかなあ、あたしはあんたのカラダの方がよっぽど羨ましいよ、女の子として」

「な……なによ麗れいこ子ちゃんそれえ……きや……!!」

親友の明るい大声に反応して、男子の視線はブルマ姿のヒカりに集中する。男の子の視線を意識してしまうと、余りの恥ずかしさに小柄な眼鏡少女は耳まで真っ赤になって縮こまってしまった。

腰まで届く長い真っ直ぐな黒髪はサラサラツヤツヤで、少女が動く度にフワリと靡いて陽光を清潔に反射させる。

大きな眼鏡の似合う小さな顔は丸い童顔で、深い茶色の瞳が大きく輝いていた。やや低いハナはコンプレックスだが、小さな口と相まって童顔を愛らしく引き立てている。

身長が百五十センチ程しかない小柄な少女はしかし、身長に釣りあうには限界とも言える程の、豊かな乳房を実らせていた。

頭とほぼ同じ大きさの柔肉が二つ、重力にも負けずに高い位置でフルンと丸く胸に乗っていて、ただ歩くだけで体操着の名前部分をポヨポヨと恥ずかしげに揺らす。

胸の大きさの割に背中もウエストも引き締まっていて細く、少女として必要な皮下脂肪意外、無駄なお肉は一切ない。

締まったお腹から広がる腰のラインは、全体的にバランスをとりながらも、少女らしい発展途上の魅力に溢れていた。

ブルマから伸びる健康的な脚は。パツパツの艶と必要十分な脂肪を乗せていて、細い足首までのラインをスラリと見せている。

「……私、男の子の視線つてキライよ……」

雪のような白い肌にサラサラな黒髪と大きな眼鏡、身長に似合ったベビーフェイスと、バランス良く発育した小柄な身体。

常にセツケンの香りが漂うロリータグラマーな眼鏡っ娘は、必要以上に男子の視線を集める自分の身体にコンプレックスを持っているのだ。

上気するロリグラ少女に、親友の笑いは冷たい。

「ふ……このゼータク娘め、それそれっ！」

「きゃっ……や、やめてえっ！」

背後に廻った麗子に両腕を捕まれ身体を揺すられ、タップと揺れまくるヒカリの巨乳は、男子達の目を存分に楽しませた。

「じゃ、ヒカリ、また明日ね」

「うん、バイバイ」

そして放課後、友人達とオシャベリをして家路に向かうヒカリの目の前に、信じられない事件が起こった。

ゴゴゴ……ガラどばガジャッ！

突然、山の方から地響きがしたかと思うと中腹が崩れ、見たこともない程の巨大な生物が姿を現したのだ。

その姿は、ウナギのようで立ち上がった山椒魚のようで、完全に異質な生物だった。

「な、何あれ——かい、じゅう……!？」

テレビの特撮番組なんかではよくある光景だ。だから少女には、目の前の光景がすぐには信じられなかった。

め始めていた。

バニー少女もだいたいエネルギーを消耗しているが、ウナギの怪獣も次第に山の方へと後退してゆく。

(これで……帰って!)

必殺の光線バニラーシュープリムを放とうと両掌を頭上高くに交差する。しかし次の瞬間、背後の海から巨大な触手がバニラーの首にビジュルツツと巻きついてきた。

「な、何っ!？」

突然の奇襲に思わず触手を押さえて振り返るバニー少女。後ろの港では今まさに、巨大なタコの怪獣が上陸を果たしたところであった。

(も、もう一体……オクトパシー!)

一瞬の隙が、光の少女コスミックバニラーを窮地に陥れる。

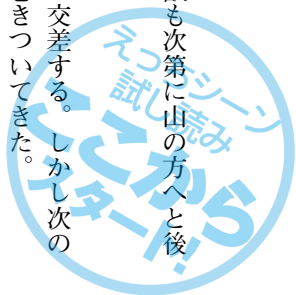
背後に意識がさらされた巨大少女に向かって、ウナギ怪獣の口から透明な液体が吐き出される。

「! きゃあああつっ!!」

突然の攻撃を防ぐ事もできず、バニラーは全身に液体を浴びてしまった。

「やあん……なにこれえ——ああ……っ!!」

突然、バニー少女の身体に異様な熱が生まれ、ヒザがカクカクと震え始める。



(何……力が……!!)

身体が熱を持ち心臓がドキドキと高鳴り、全身が脱力させられてゆく。ウナギ怪獣が吐き出した体液は、交尾の為の淫性体液だったのだ。

(や、やだ……身体が、熱い……!)

動転したバニラーは、強力な触手の力でそのまま背後に引き寄せられてしまった。

「きゃああ……っ!」

途中で体勢を立て直したものの、巨大タコ怪獣と向かい合わせで捕らえられてしまった、ロリグラバニーの巨大少女。

ブニブニしてて柔らかいタコの身体には、パンチもキックも全く通用しないようだ。身動きの取れなくなったバニーの身体に、更に数本の熱いタコ触手が絡められた。

「きゃんっ! は、離——してえ……っ!」

巨大バニー少女のお腹が触手に巻かれ、両脚を捕られ、両腕までもが拘束される。その間にも、背後のウナギ怪獣からは催淫性の体液がブシュビュウと吐きかけられて、少女の頭や背中、丸いお尻などが穢される。

身体の前後に淫液を浴びせられた事で、唇や胸の先端、背中や媚肉スジなど、特に神経の弱い場所が急速に媚熱を帯びてゆく。

(こ……この感じ……!!)

週に一度、どうしても身体が熱くなつた夜に声を抑えて、してしまふ、秘密の密戯。今身体に感じている熱さは間違ひなく、性の欲熱だ。

「こ、このままじゃ——ひやああつっ!!」

パニラーのお腹が、細い背中が、巻きつけられた吸盤触手によつて媚弱な力でチュウチユウと吸われた。ヌルヌルとした無数の熱いキスで、ただでさえ敏感なお臍や背中の中の神経が、くちゆくちゆと吸い撫でられる。

「あくっ……変に……触らな——ひふうっ!」

くすぐつたいのにしかし、その向こう側にある蕩かされそうな感覚。身体の抵抗力が奪われてゆき、自分では感じた事のない強い性感に、思わず脚が内股になつてしまふ。

更に触手は、ぷりんと艶めくパニーのお尻にも絡められた。

「ひ——ひやああ……っ!」

尻頬柔肉を下からヌトヌトと熱い触手で撫で上げられて、弱いくすぐつたさにお尻全体が痺れさせられる。

更に、ぬるぬるとしたタコ触手に尻頬の柔谷間まで触られて、ヒカリの脳裏は焦燥に追われてゆく。

お腹や背中から感じるピリピリとした媚弱感電に、お腹の奥がキュウ……と熱を持ち、食い込まされた股間の溝が更に深くされる。

（は……離れ、ないと……くううっ！）

両腕を突っ張って離れようとする、手足に絡みついた触手吸盤は更に強力に拘束してくる。首と手足を拘束されながら、パニラーは更に二本の触手に豊かな双乳を絡め取られた。

「ああっ、む、胸っ……いやあっ！」

左右の外側からそれぞれの柔乳をヌルタコ触手に包まれて、双つの媚肉山は根本から絡まれ、突き出される。

ヒカリにとってコンプレックスでもある巨乳を更に強調させられるような拘束で、理性が羞恥で覆われてゆく。

絡まれた豊乳は左右別々にタツプリと揉み揺すられながら、先端の媚突だけを触手の吸盤で囲まれ吸われる。

「んうっ……そんなに、しないでえ……っ！」

異様に熱を持ったヌルヌル触手で乳房全体がコネ撫で上げられて、双乳全体が内部から暖められてゆく。

更に先端媚突を揉み吸われると、硬化した乳首から胸の奥へ、更に下腹部からお腹の最奥へと、媚弱甘電に通じ抜けられてしまう。

（わ、私の胸が……タコの触手で……！）

弄ばれて形を変える自身の双乳の姿は、ヒカリ本人ですら官能を覚えさせられてしまう

程セクシーに見える。

横のビルからバストを覗く人々の視線が、少女には恥ずかしくて堪らない。

ゴボグブ、クボグボ！

パニー少女を絡めるタコ怪獣も、ウナギ怪獣と同じく発情期のだろう。獲物少女と密着しているのに、食べようとせずに発情させようとばかりしている。

パニラーが身動き取れない事を理解したのか、ウナギキングはペニスを隆々と勃起させながら、ノシノシと囚われた少女に近付いてきた。

「や、やだっ……こつちに来ないで……っ！」

手足に絡むタコ触手を振りほどこうと必死に抵抗するパニー少女。このままでは怪獣たちに変な目に遭わされてしまう。しかも周りには闘いを見守る人々やカメラが、大勢いるのだ。

しかし抵抗虚しく、巨大パニーヒロインがもがけばもがく程、両腕は更に左右に、両脚も大きく開かされてしまった。

（ち、力が……入らない……もしかして……！）

元々ウナギキングとの闘いでかなりのエネルギーを消耗しているのだ。

更にウナギの淫液を掛けられて敏感にされた身体を、タコの吸盤で撫で回されて、パニラーのエネルギーは今や極限にまで消耗してしまっているのだ。

壁に手を突いて開脚させられたような姿で拘束されるウサギ少女の背後から、交尾を求めめるウナギ怪獣が迫る。

(と、とにかく……離れないと……っ！)

バナラーは額に意識を集中させる。相手を切り裂く光線技バナラーピットを使う為だ。怪獣とはいえ生き物なのだ、傷付けるのは気が引けるが、今は仕方がない。

巨大少女がタコ怪獣の一部を狙って、ウサ耳バンド中心部の宝石から、光線を発射しようとした瞬間――。

「バ、バナラーピット――きやああっつ！」

ウナギ怪獣に背後から両肩を捕まれて、まるで後転するように少女はひっくり返されてしまった。

回転中に真上へと射出された三日月型の極薄光線は、どちらの怪獣に当たる事もなく遙か上空へと飛んで消えていく。

消耗したエネルギーを更に消費してまで射出出した逆転の攻撃は、完全に無駄に終わってしまっただのだ。

「そ、そんな……あうっつ!!」

バナラーは両掌を広げて両脚を開脚させられたまま、上下がひっくり返された恥ずかしい姿にされてしまう。

愛液をタツプリと溢れさせる。

触手に押されてスーツがずれ、タコ脚を飲み込まされるバナラーの肛門が人々の目に露わにされた。

ビルを背景に肛虐される巨大ヒーロー少女の恥態が、写メやカメラで一斉に写されてしまふ。

「やあん……っ——こ、こんな姿——撮っちゃやだあつつ!!」

大勢の人の前で両乳房を露出させられ揉まれ、更に怪獣の触手で肛門を舐られている。

余りの恥辱に理性は逃げ出した程なのに、淫液を染み込まされた身体は完全に脱力し、お尻は異常な程に性快楽を甘受して肛虐触手をムチュムチュと喰わえ飲み込む。

瞳は反抗の意志を表しながらも、愛顔は性快楽に蕩け、頬は上気し、全身は桜色に染まりシットリと汗を浮かせていた。

グブブル、ブパブパ!

獲物の恥態に頃合いを感じたのか、ウナギ怪獣が黒太いペニスを少女の秘処に押しつけてきた。

「!! ま、待ってえっ——そんなのやだああつつ!!」

蕩かされた処女秘唇よりも熱を帯びた硬い牡肉の感触に、少女の理性はただ怯えるしか無かった。必死に足掻いて逃げ出そうとするのに、怪獣に押さえつけられた身体はビクと

も動けない。

しかも淫液に開発され触手に舐られ続けた身体は、子宮に渦巻く強い飢餓感で力が入らず、自ら牡の征服をも望み始めていた。

「このまま怪獣になんて——あふやううっ!!」

ウナギペニスだが、ジャマなハイレグをどかせようとムチムチと黒い身をくねらせる。

熱い秘唇を力強く上下左右にこね回されて、粘着力を失ったスーツが愛液の滑りに助けられながら少しずつずらされる。

敏感な秘唇をかき回される強い媚甘刺激に、ヒカリの脳裏が淫熱快楽で灼き焦がされてゆく。

ムチユ、クチユ、ぷちゅりっつ!

蠢くウナギに引っかけられて、遂にバニーのハイレグが剥がされてしまった。

「!! いっ、いやああああっつ!!」

多くの人々やカメラの前に剥き出された、バナナの秘処。穢れを知らない秘められた処女華は、タップリと愛液をこぼしながら鮮やかな桃色に上気していた。

普段ピタリ……と閉じられている左右の媚肉は怪獣の触手で舐られ続け開かれている。

上端の媚肉芽は硬化して、柔らかい包皮からその身を覗かせていた。極薄の肉花卉は朱く充血して左右に開花し、更に奥まで空気に触れさせている。

柔らかく複雑なシワを見せる艶めく媚肉と小さく開いた尿口、怯えながらもパクリと小口を開く処女の膣口も、全ての媚唇が愛液の艶に包まれていた。

そしてその下で太い触手を飲み込まされた、朱い肛門。

少女が秘すべき全ての場所に、多くの人々の視線が突き刺さる。

巨体少女の秘処は文字通り、隠しようもなくその造りの隅々までを、完全に晒されてしまった。

(み、みんな見ないで……お願いい……！)

視線を物理的な刺激と感じて、パニラーの秘唇がひくんつと蠢く。障害物の無くなった少女の秘処に、ウナギ怪獣のペニスガムチュリリツと押し入ってきた。

「いっ——待ってえっ、いやああつっ!!」

さっきまで左右に身を振っていたとは思えない程、黒い怪肉は堅固に反り返って侵入してくる。狭い膣道を押し広げられながら、ヒカリの脳裏はただ焦燥に駆られてゆく。

「離れてっ、許してえっ——んはうっつ!!」

怯えた少女には、ただ許しを乞う事しかできなかつた。しかしそんな哀願が怪獣相手に通じる筈もなく、処女の媚孔は人外の巨大ペニスをツプツプと押し込まれてゆく。

何も知らない処女の膣壁は、ペニスに対して強烈な圧迫感を感じていた。まるで内臓全てが胸まで上げられ口から押し出されるような、強すぎる圧力。

「や——あく……おなか……いやあ……!!」

ウナギキングの犠牲器が、バニー少女の処女膜に到達、更に力強く押し入ってくる。

「お願いやめてっ、いやあっ! ——っ!」

桃色の処女膜が白くなる程押し伸ばされた次の瞬間——。

——ぷっつ——。

「いっ——!! 痛ぁいいいっつ!!」

コズミックバニラーは遂に、多くの人々やカメラが見守る前で怪獣によって犯され、処女を奪われてしまった。

桃色に充血した会陰を、綺麗な鮮血がツウ……と流れる。

(……わ、私、怪獣にい……!!)

しかし犯された少女は呆然とする暇も与えられず、怪獣は繁殖の為の性行動を開始した。バニラーの腰をガツシリと掴んだウナギキングは、一刻も早く子宮内に射精をしたいと言わんばかりに、猛烈に腰を振り立て始める。

「ひい——い、痛いっ身体が裂けちゃうっつ!!」

全身がバラバラにされるような衝撃に少女は悲鳴を上げる。しかし怪獣ペニス是最奥の子宮に向かって、再び淫液をビュウビュウと放射し始めた。

「いはっ……な、何……痛く、ない……!!」

身を裂くような痛みはスウ……と引いてゆき、替わって胎内奥深くからは強い熱性感が起こり始める。

(な、なんで……お腹が……身体が……!?)

「な、なに——はふつくううつつ!!」

ズチゅつむチゅつちゅつつ、じゅぷつ!

怪獣の獣勃起が引かれると、子宮全体で強烈な飢餓が風船となつて膨らまされて、逆に強く押し込まれると、恥骨や尾てい骨が内側から強い振動で叩かれる。

少女が知らない、女性自身の密戯では決して体験できない、牡からのみ与えられる、女の本能を蕩かされ満たされてしまう程の、胎内の充足感。

(こ、こんな感覚を、教えられてしまったら、私は、もう——!!)

決して牡には逆らえない身体にされてしまう事は、処女のカラダにも、解る。

「や、やだよお——ひうつ! こんな……はんつ——されたらあつつ!!」

身体が内側からゴォゴォと熱せられる。自分でも知らない奥深い女体の性快感が、怪獣の牡肉に目覚めさせられる。

理性では決して受け入れられないのに、犯される肉体は牡肉の存在感にどうしようもなく屈し、躡けられてゆく。

「やめてえ、やめ——へあふうつつ!!」

ずちゅずっジュぷつグツちゅッくぷっ！

太硬い熱肉で膣粘膜を突き上げられる少女の豊かな双乳に、タコ脚触手の新たな責めが加えられた。

触手は乳房全体をこねながら微妙に振動をして、媚柔肉全体の性感を刺激する。更に揺れる先端媚突を触手先でクルリと肉巻きにして、極小さな吸盤で周りからチュツチュッと吸い上げる。

「ひやめえつつ！ そんなにい——されたらあつつ——おかひくなっひやううつつ!!」

強すぎる性感に少女の脳裏は快楽に混乱し、遂に呂律まで廻らなくされてしまった。

豊かな両胸の性神経を媚振動で焼き上げられて、敏感な乳首を細かく吸われる。

お腹を絡める吸盤触手には下腹部の上から子宮を刺激され燃やされて、肛門からは触手の吸盤で子宮近くの腸内をかき回される。

獣の牡肉で突き込まれる媚孔は入口も膣壁も熱太い硬肉で犯されて、最奥の子宮では休む暇なく催淫体液を吹きかけられ続けている。

るちゅつぐちゅツぎゅプツぢゅプツツ！

「やらあ、らめえつつ——ひひやああつつ!!」

突き擦られる肢体が扇情的にくねり、豊かな柔乳が天を向いて波打ち、揉み上げられる。肛門は飲み込まされた触手をクチュキュチュと喰い締め、アスファルトの上にポタ。パタ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>